

令和6年12月17日

総合教育会議 会議録

長岡市

1 日 時 令和6年12月17日(火曜日)

午後3時30分から午後5時00分まで

2 場 所 アオーレ長岡 市民交流ホールD

3 出席者

市 長 磯田 達伸

教 育 長 金澤 俊道 教育委員 鷲尾 達雄 教育委員 大久保 真紀

教育委員 廣川 佳予子 教育委員 熊倉 達也

4 職務のため出席した者

地方創生推進部長 長谷川 亨 教育部長 竹内 正浩

教育部参事(科学博物館長事務取扱) 金垣 孝二 子ども未来部長 星野 麻美

政策企画課長 五十嵐 智行 教育総務課長 桜井 秀行

教育施設課長 吉田 朗 学務課長 大竹 美加

学校教育課長 中村 一幸 学校教育課主幹兼管理指導主事 玉木 暢

学校教育課主幹兼管理指導主事 佐々木 潤 学校教育課主幹兼管理指導主事 稲毛 真哉

中央図書館長 梅沢 一茂 子ども・子育て課長 深澤 寿幸

子ども家庭センター長 大久保 千春 保育課長 江田 佳史

スポーツ振興課長 中山 玄 政策企画課長補佐 早川 裕之

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐 山内 清美 教育総務課庶務係長 今井 香

6 会議の経過

(竹内教育部長) 本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。ただいまから、令和6年度第1回長岡市総合教育会議を開催いたします。それでは会議の冒頭に磯田市長からご挨拶を申し上げます。市長お願いします。

(磯田市長) 皆様、こんにちは。本日はお忙しいところ、しかも足元の良くない中お集まりいただき、ありがとうございます。教育委員の皆様には日頃から教育行政、教育委員会のいろいろな活動についてご意見賜りまして本当にありがとうございます。今年も残すところ半月となってまいりました。振り返ると今年の1年、教育委員会は、いろいろな評価を受け、私は素晴らしい1年だったのではないかと考えております。今年の1月に長岡教育情報プラットフォーム「こめぶら」が文部科学大臣表彰を受けました。そして4月には中央図書館が令和6年度の子どもの読書活動優秀実践図書館として、文部科学大臣表彰を受賞したということであります。それと日経新聞の先日発表のありました、共働き子ども子育てしやすい街ランキングで去年18位という評価があつて、今年は全国23位にちょっと評価を落としましたが、それでも北信越で依然としてトップという評価をいただいて、長岡の子育ての取り組みを、依然として高い評価をいただいているなということで、この1年間いろいろ評価いただいたこと、教育委員の皆様からご指導、アドバイスもいただく中で、こうして1年間過ごさせていただいたことを心から感謝申し上げる次第であります。教育大綱をこれから作るということで、子どもたちや教育を巡る環境というものが本当に大きく変わってきたなと感じておりまして、また、これからそういったものを踏まえた議論をしていたきながら、ぜひ次期教育大綱の策定にあたっては、皆様の意見をしっかりと反映させていきたいと考えております。今までのこの歩みを大切にしながら、更に前に進んでいきたいと考えているところであります。教育大綱の議論を通しながら、私市長と市長部局も含めた長岡全体でこの教育委員会をどのようにバックアップし、また教育を進めていくか、あるいは教育というものは、教育委員会のみならず、福祉、環境、まちづくりといろいろな部分に関わってきている時代でありますので、長岡市一丸となってこの教育をよりよく前進させていきたいと考えておりますので、ぜひ忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしく願いいたします。

(竹内教育部長) それではここから議事に移りたいと思います。なお議事進行は市長からお願いしたいと思っております。市長よろしくお願ひいたします。

(磯田市長) では私の方から、議事の進行をさせていただきます。最初に、概要と策定スケジュールについて説明をお願いしたい。

(竹内教育部長) 【資料に基づき説明】

(磯田市長) ただいま説明いたしました教育大綱の概要と、策定スケジュールについて何かご質問等ありますでしょうか。

(磯田市長) 続きまして、次期教育大綱について説明をお願いしたい。

(竹内教育部長・星野子ども未来部長) 【資料に基づき説明】

(磯田市長) 盛りだくさんではありますが、説明に関して何か質問はございませんか。では、これから意見交換に入ります。内容についていろいろなご質問とか、趣旨がどうかということにつきましても、意見交換の中で、その都度出していただければと思います。どなたか、いらっしゃいませんか。

(熊倉委員) 今回大綱案の見直しの中で、基本理念ですね。私はこの案で大切だなと思ったところが、「社会」という言葉が入ったところです。当然といえば当然なんですけれども、教育の目的が人格の形成はもちろんなんですけれども、社会の構成者をつくる大きな目的の一つとして、「社会」という言葉がしっかりと入ったことです。一人ひとりの個性とか人格はもちろん大事なんですけれども、それを支えるのは社会だし、また社会があつて、人付き合いがあつて、その社会を創るのは、一人ひとりお互いの関係性を意識しながら、基本理念をしっかりと教えることは意義あること。賛成するというと変ですけど。

(磯田市長) 基盤を評価するということですね。「社会」という切り口は、一方でどういう社会なのかということはありませんでしょうか。幸せな社会とは何か、そういうものは含意されてるものは、特にあるわけではない。

(竹内教育部長) それが方針1から方針5までの中に散りばめられているのですが、例えば、5ページの共生社会の実現というテーマをご覧いただきますと、改正案では①から③までが今後、この方針が固まった後、いろいろな政策を創るときの方角性を示すものとして見ておりますが、長岡の素晴らしさを知るものとか、愛着と誇りを育

むものとか、ふるさと長岡を語り合えるとか、互いの個性を認め合いながら、多様性を尊重し、他者と協働できるということが、共に認め合う社会の実現に必要なものということで、ここで言いますと①②③も関連することとして考えているところでもあります。

(磯田市長) 4ページの改正案の趣旨の中にいわゆる共生社会を色濃く打ち出しているということですね。この社会について何か皆様、ご意見はありますか。現行は「幸せを創り出していける」ということになっていますが、今度は「幸せな社会を創り出し」、ということで切り口が変わって、これは一体、どうですか、皆様。

(廣川委員) 今、子どもたちが、0歳から保育園で育つ環境で、社会の中で育つ子どもが、以前より増えている中では、自分が社会の一員であると認識する年齢もおそらく以前よりは低くなっているのではないかと思います。その社会を構成する一員であるという自覚というか、そういったものが芽生える年齢が低いということは、その子どもに関わる大人たちもそういった意識で子どもたちに接することも必要になっていくと思いますので、そういった社会という意味合いと、ふるさと長岡の一員であるという、そこが二つ、私は書く意味があるのかなという感じを受けました。

(磯田市長) よく「3歳までは母親が」みたいな、そういう対応はどうか、3歳児神話なんですかね。一方では、別に1歳から預けても、そのことによってむしろ家庭での子育ても豊かになるし、それだっていいんだ、むしろその方がいいんだという考え方も強くなってきたかなと思うんですが、そういう意味で1歳からみんなと一緒に育つ時間を持つということは社会性というものを小さい時から身につけていくと、そういうことですね。そういうものを前提とした、この理念になってるということですね。

(大久保委員) 日常生活で電車に乗っていると、人に無関心な人、利己的な人が、昔に比べて増えているのかなと私は感じるのですが、この趣旨の中で、利他的になることが自分の個性が尊重されて輝くことと繋がるってすごく大事なことだと思います。趣旨の中に人と関わったりとかそのためにということも社会も。

(鷲尾委員) 社会の捉え方についてはいろいろな考え方があって、何か一つ設定に向かっていくことがどうなのかなということが、正直なところです。長岡市の教育大綱

としてあるべき社会とは何かと定義づけが難しい。それぞれ考え方がるので。社会に関する定義づけ、あるべき社会という部分に関しては、私個人としては、あまりそこに入り込むと泥沼に入りそうな気がして。それよりも方針3に生き抜く力の育成、社会があって、個人個人が結局社会を創っていく人なので。今、これからの子どもたちに必要とされているのは、例えば戦後一貫して僕が子どもの時は、日本人は、8割がた9割がた中流という意識があって、勉強して、いい学校に入って、いい会社に入って中流の生活をするのが一つのなんて言うんでしょうか、大雑把な人生の成功のスタンダードであったけれども、もうこれが完全に壊れている中で、日本人全体が目指す、1億人が目指すような社会の成り立ちみたいなものが、完全に日本に限った話でなく全世界でそういう時代かもしれない。一人ひとりが、不確定、不確実な時代においてどうやって生き抜く力をもってもらえるかが社会の定義というよりは、社会そのものが、定義しづらい時代において、そんな中で共有しないでしっかりと生きていく子どもたちを育てていかなければいけないわけで、そこに長岡の教育はコミットしていくんだと。僕は、社会云々というよりも、方針3のところに関心があるし、そこを打ち出していくことが大事じゃないかと思います

(磯田市長) この基本理念の中の「幸せな社会を創り出していける」というその前に、「一人ひとりの個性が輝く」とあってですね、そういう意味で、いわば、孤立化が進むことも、人間社会というか、人のことも考えられる、そういう子の人格というか、そういう子どもに育てていこうというのは、方向性としてはやはり私自身も大切なかなと思っています。特にスマホとかタブレットとかを1日何時間も見つめ続けるような人生を、だんだん若い人も送るようになった時に、そういう社会性とかですね、人との関わりというのもこれからどうなっていくのか懸念されるところで。そういう意味で、これからはむしろ、今ネット社会と言われる一方で、個別のお付き合いとか、人間関係というのがむしろ大切になってくる時代なのかと思っております。そういう意味ではこの基本理念というものを、一人ひとりの個性が輝いて一人ひとりが幸せになるという方向からですね、やはりみんなで仲間で社会で幸せになっていくという方向性に転換したというのは、ぜひ皆様方の共感をいただければ、私としてもありがたいなと思います。他に論点として、今、鷲尾委員から、やはりそういう中であっても、

そういう中であるからこそむしろ生き抜く力とか、自分の夢を描いて志を立てて生きるというそういう子どもを育てるといことが、やはり依然として大きなテーマなんだと。「熱中！感動！夢づくり教育」といいますか、長岡の教育の一つの、ここ何十年の伝統というものをしっかりと引き継ぐということですよ。そこは、この中できっちりうたわれていると思いますが、どんな感じでしょうね、一人ひとりの子どもたちのそういった伸ばし方についてどうですか。昔の1億全部中流みたいなこともありましたよね。全部中流みたいな意識があって、そういう中で会社に勤めて定年までしっかり勤め上げてという終身雇用を前提とした高度成長期を挙げた働き方、人生の生き方。例えば会社に勤めて、その会社の社宅にみんなが入って、隣同士同じような教育をして同じようなものを食べて、そして同じような子どもを育てて、また自分のお父さんと同じように会社に入って生きていく、それが幸せなんだよと、そういった時代もあったわけですけど、今はむしろ格差社会で、そういったものがガラガラと崩れ、終身雇用制度も、これからなくなっていく方向にきっと行くんだろうと思いますが、そういう中で依然として偏差値の高い子が偉いとか、そういう子どもに育てよ、どうなんでしょうか。依然として画一的な価値観があるようにも思いますが、皆様、その辺はどうお考えですか。多様性はまだまだ十分でないなという感じですけど、どうですか。今、子どもたちは何を目指しますかね。やっぱり大学入学共通テストで高校でいい点数を取るとか。

(鷲尾委員) 僕は、バイアスというか偏見があるかもしれませんが、やっぱり諸外国に行けば、勉強ができる人が、いわゆる偏差値的な高い大学を目指す。そもそも大学に50%も60%も行く今の日本というのがそもそも異常な状態で、本当は大工をやりたいとか、いろいろな道があってこそ社会が成立するはずなのに、今は戦後一貫ホワイトカラーになることが、中流の生活に行けるパスで、その結果、非常に社会としても足元、土台が崩れかかってくるような社会になりつつあって、どういう社会を創ろうかとなった時に教育が問われるんだけど、市長がおっしゃるように、依然、偏差値、ヒエラルキーというか、何かそういう序列じゃなくて。例えば市とは関係ないけれど、何で県立高校に、長岡市の地域を支えるための人材を輩出する学校を目指す高校がないのか。

(磯田市長) この間、天才プログラマーとして注目を受けてる清水亮さんという、この方は中学校は江陽中学校に行って、そこにうまくいることができなくて、附属中学校に行ったのですが、附属中学校の全校生徒を集めて講演をしたんですよ。決まりきった親が言うような、あるいは社会が認めるようなコースを歩むことが幸せには絶対繋がらないんだと。自分の思いでいろいろな道があるんだから、それを徹底的にやるのがこれからの時代、本当に意味あることで、ちょっと偏差値のいい大学に行っても意味があるわけではないということ、1時間以上にわたって熱弁をふるったんですよ。終わった後で子どもたちからものすごい質問が出て大変な騒ぎになったらしいんですが。清水さん自身の人生も偏差値の高いところの教育で成功した方では全然なくて、一方、今SONYグループのギリアという会社を作って、そしてその経営も離れていますけれど、日本で人工知能AIの第一人者になってですね、動向をリードしている。そういう意味では、清水さんの感覚からすると、今の子どもたちが目指すもの、乗っているレールというのが、いかに自分の選択とは異なるものになっているかということです。そういう意味では、いよいよそういうことが壊れつつあるというか、どうなんでしょうかね、社会の方も少し頭が良くて勉強できる子だけを求めるんじゃないじゃなくて、全然そうでないタイプの子どもというか、若者を求めているということなんでしょうね。時代が大きく変わりつつあるなど、子どもたちがそういうふうにもものすごく反応したということは、おそらく本心でもそういうふうには薄々感じていながら、一緒に勉強しているんだらうな。個性を伸ばすとか、夢を叶えるとか、志を立てていくという子どもたちに、夢は何を教えたらいいのか、何をどういう学びを与えたらいいのかということですかね。

(金澤教育長) 偏差値が、ヒエラルキーがという、話もあったのですが、急には変わらないんだけど、少なくとも変わってきていると感じていて、もっと言うと、レールの話で言うと、昔だと、高校に行って、大学に行って、いいところに勤めてというレールが敷かれていて、レールから外れると社会から外れた人という感覚があったのですが、今は、レールが明確に複数個もあってですね、例えば学校に行かない子でも、違うレールの中で、社会の中で生きていけるとか確実にできてきているんですね。とって、本当に偏差値主義が完全になくなるかということそれは無くなっていないけ

れど。ちょっと生々しい話だけれど、いろんなところで言われてるのは、早稲田慶応は残っているけれどそれ以外はどこでも一緒ですよっていう話になって、急な変化はないんだろうけれど、確実に変わってきていることは確かだと思うんですね。

その中で清水さんのレールはかなり特殊なレールなので、その話は刺激にはなるけれど、同じレールを歩ける子はすごく数少ないと思うんですけれども、そういった話を聞くことで違うレールを見つけられる子どもも出てくるはずなんですね。そのときに私達があえてこの方針3を示してるというのは、社会はそこまでじゃないんだけど、少なくとも長岡市教育委員会などの教育の中では、意識としては、それぞれの個性が社会を生きていく、その個性を伸ばすことが大事なので。その個性は自分で磨いていくこともあるだろうし、他からの刺激で自分がまた伸びていくこともあるだろうし、いろんなケースがあると思うんだけど、それぞれの中でいわゆる偏差値ではない価値観のところがいっぱいあるんですよということを、私達は持ちたいと思っていて、その想いがこの方針3に謳われているのかなと思っている。もっと明確な表現がいいのであればそういうこともあるんだろうけれど、この中にある個性とか、可能性というのは、まさにそういうことで、意識されてるのかなと自分の中で解釈しているんですけれど。それを伸ばしていくのは、残念ながら学校の中だけでは、通用しにくいところがあります。学校には学習指導要領というものが示されていて、その中身、内容について学ぶことが学校というところがあるので。それプラスアルファの部分ではないわけじゃないんだけど、やっぱり十分ではないところがあります。多様なレールとか可能性を伸ばすことが長岡でできるのは、オール長岡という意識の中で、学校外でその子どもたちの可能性が伸びるとか、伸ばしていく場があるとか、体験があるということが、長岡の魅力になるんだろうなと思っています。

(熊倉委員) 先日OECDの成人力調査の結果が発表されまして、10年に1回かな。

2回目の国際比較調査ですけど、日本の成人力は、読解力、数的思考力と問題解決能力、日本の18歳から65歳でスウェーデンやフィンランドなどと並んで世界のトップだったと。特に日本の特徴が、下位の層の人たちの量がすごく少ないんだそうです。私はこれを見て、少なくともこの10年20年30年の日本型教育はやはり素晴らしいなと思ったんですね。基本学校教育が、そういった基礎的な読解力とか、数の力とか、

問題に向かっていく力を、きちんと培っているから、大人になってもそれは使える状況なんだと。しかもそれが、下位レベルが少ないところがいいですよ。いわゆる誰もが一定レベルを超えているという証拠ですから。すごい良い調査がでてきたなど見ているところなんです。それを前提にして、一人ひとりの個性をどう生かすかとか、「熱中！感動！夢づくり教育」であれば、私、導入したときもよく覚えているのですが、エクセレンス、卓越とかそういう感覚でそういう力を持った子どもを伸ばそうよということで始まった、立ち上げ時の印象が深くあって、そういうベースがあって初めてポイントがお互いどっちがベストじゃないと思うんですけれども、生き抜くといった場合には、やっぱり長岡の伝統で、へこたれない子に向かっていくと、つまり、一人ひとりが社会をちゃんと創っていくと同時に、自分がどうやって生き抜いていくんだろうかということを考えて、世の中をこのイメージを共有しなくてもいいんじゃないかなと私は思う。さっきの話だと、大学の入試も今、いわゆる大学入学共通テストだけじゃなくて、私立は5割以上、英語入試になっているそうです。つまり、もう、高校の推薦を受けたり、面接したり論文を書いたりして大学に入ったら何をしたいかというところの入学のセレクションになっていますので、明らかに変わってきているということは、事実です。

(磯田市長) 英語入試が半分だとすると、その偏差値のヒエラルキーも、実はもうガラガラ変わっている、実態がそうならない可能性がありますね。

(鷲尾委員) 多分間違いないですよ。

(磯田市長) 子どもたちが少なくなってきた、学校経営も変わってきているから、偏差値の高いところで本気の勝負で入ってくる人もいるけれど、そうでないところが半分以上となると、果たして本当の偏差値って何なのかというのは、もうわからない時代かもしれないですね。ある意味いいことでしょうね。

(熊倉委員) 選択肢が増えたということですね。

(磯田市長) 教育長がおっしゃった、まだないルールというのがやっぱり私は問題だと思って、この社会の中で太いルールが依然としてあって、そのルールを行かざるを得ないという子どもたちがいっぱいいる中で、清水さんに言わせればそりゃあ、おかしいんだよと言いたいところだと思うんですよ。もっと多様なルールがあるといい。

イノベーションでいろいろやっている、さっき鷺尾委員もおっしゃったんですけれど、高専のような、勉強だけでなく、理学工学を15歳から学ぶという、ああいうコースがものすごく評価が高いんですよ。そういう意味では、単純に受験校を決める時、実業高校というよりも、高専のようなコースも私は非常に高評価されているのかなと思うのですが、その辺どうでしょうか。多様なレールといっても実際、実業高校に行って、明確な進路のイメージが十分に与えられるかということ、どんな感じですかね。工業高校卒業生は本当に長岡では欲しいという人がいっぱいいますね。

(鷺尾委員) 知り合いの電気工事会社を運営してる方々にお聞きすると、誤解を恐れず言えば、それよりも逆に、普通高校、もしくは全く関係のないゼロベースで来た方が0から学ぶと。教えてくださいという謙虚な気持ちで、現場に向き合っただけの方が、電気コース、工業高校の電気工事で勉強しました、資格を取りましたというところで本人はそういう自覚がないかもしれないけれども、やっぱりちょっと自信過剰であったりとか。本当の現場で学ぼうという意識がない、あらゆる部門で言えることだと思いますけれど、勉強したことや資格を取ったことが社内で通用することは、ほぼあるわけじゃない。それを勉強してしまったことによって、だから実学になっていない。日本の教育においては、多面的にそういう要素ってあるじゃないですか。勉強したことが社会で本当に活かせるか。それこそこの間、何かのアンケートで出ていましたけれど、自分が勉強したことが社会で役に立っていないという人が87%というアンケートがあった気がしますけれど。勉強したことが本当に社会にどういうふうに繋がっていくのかというのが僕自身もそうでしたけれど、子どもは本当にイメージできるのか。それは小中義務教育段階の話からちょっと逸脱してしまったかもしれません。

(磯田市長) どういう知識を授けたらいいのか、オール長岡でという中で義務教育で教わらないこともいろいろあるから、私は学校外での学びの場というものをイノベーションのいろんな動きの中で、子どもたちに作ってやりたいなということはあって、例えば、ミライエ長岡でいろいろな講座なり学びの場、体験の場を作っていきたいと思っているんですけれど、ただ、今、鷺尾委員がおっしゃったように、そこで何か知識を得たから何か役に立つとか、その子の人生に意味があるかということ、必ずしもそうではなくて、確かなマインドというか、気持ちが本当になれば知識があってもし

ようがない。その辺は、この教育大綱という考え方の中では、熱中とか感動というのはあえて言うというのはそういうことでしょうね。

(金澤教育長) 熱中したことが、自分の夢とかが必ずその将来に繋がるかということそんなこともなくていいのかなというか。例えば、プロ野球選手になりたいと思ってもなかなかできない。でもなりたいと言って、そこで一生懸命その野球の練習に励んで夢中になったりする体験というのが貴重なものであって、それが直結して、社会で自分のものになるという、例えばすごく理科が好きの子が、理科をすごく夢中になってやって、将来理科の仕事で生業を立てられるかということ必ずしもそうではないだろうし、そうでなくてもいいと思うんですね。ただ、ここで言っている熱中感動というのは、将来に直結するという意味はあまり持っていないと私は思っていて、この時期にやっぱりそういう体験をすることが人生の中で貴重だという意識でいいのではないか。ただ、高等学校とか大学に行った時にはある程度目的意識を持って行くわけなので、その辺についての何かちょっと社会のかみ合わなさってのは、なんとも言えないところはありますけれど、少なくとも今ここで語っている、教育大綱の範疇で言うと、このものが自分の生業になるというような意識はなくていい気がします。

(廣川委員) 皆さんのお話を聞かせていただいて改めて思ったんですけど、やはりそのプロセスの中で感じる事、目的ではなくて、その過程の中で何を感じるかというのが子どもたちにとってすごく大切なことで、例えばその一つのコミュニケーションだと思うんですね。学校の先生、塾の先生だけじゃない、大人との関わりとか、誰かが世話をしてくれない中で自分でどうやってコミュニケーションをとっていかうか、そういった経験を学校の外でできることでコミュニケーションがうまくいかなかった時どうすればいいんだろうって自分で考えることとか。そういった何か、私はコミュニケーションがむしろ図れることというのがすごく子どもたちの学びになるのではないかと考えています。

(磯田市長) コミュニケーションというと仲間とのコミュニケーションもあるんだけど、今先生とのコミュニケーションがなかなか先生も忙しいし。子どもたちと遊ぶ先生ってそんなにいますか。

(金澤教育長) 小学校では遊んでいます。

(磯田市長) コミュニケーションの対象というのは、誰のことをおっしゃっていますか。

(廣川委員) 子ども同士もそうですし、子どもと先生もそうですし、ミライエ長岡とか、学校外のところの大人も。地域の大人と関わる機会ももしかしたら減っているのかもしれないですし、いろんな仕事をしている大人、いろんな価値観をもっている大人と触れ合って、自分と違う価値観に触れることがとても大切なので。そこで子どもたちが自分で考えて、年齢が上がれば、うちの親と言ってることと違うな、先生が言ってることと、この大人が言っていることは違うな、そういったものをいろいろ知っていくことで視野が広がると思うんです。

(磯田市長) 子どもにとってやっぱりそういうのは大事でしょうね。大人と喋ることが面倒くさいなんていう子もいると思うんだけど、でもどうですかね。今ちょっと考えているんですが、長岡の4大学1高専、そういったところをリタイアした教授、100人規模で長岡に貢献したいという人がいるんですよ。そういう人たちに、その方々の専門性で何かお話をしたり、勉強のチャンス子どもたちに与えたらどうかと。案外高齢者と子どもの相性って悪くない。しかも専門性が高い。学校の先生と違う切り口というか、ある意味狭いかもわからないけれど、深さがある人たちと、子どもたちが接する機会、いわば、新しい先生の塊をね、長岡でつくっていったらどうかなと思っているのですが、そんなものはどうでしょうかね。これは教育委員会がやるというよりも、むしろ市長部局の方で、ミライエ長岡の方で、そういったものを作って、タブレットで見られるような、そういう形にしていけたら私としてはいいなというアイデアがあるのですが。まちの先生のちょっと高度版ですね。多様なそういうコミュニケーションの機会、必要でしょうね。今まで義務教育のそういった部分をお話いただいたのですが。子育て支援について入ってですね。この間の市長選の時にいろいろな方とお会いして、子育てをしている若いお母さんから常に言われることが、発達障害とか発達の問題なんです。小さい頃からそういう傾向がある子をやはり小学校、中学校、ずっと、ある程度一貫して継続的に見て行ってほしいというご要望があるんです。そういう意味では義務教育の6年、3年だけじゃなくて、幼稚園、保育園の時から、教育とか子育てという、保育というものと、どういうふうに繋げていくか。そういう

ものが大きな課題になっていて、来年は、発達の対応をしっかりと長岡モデルを創っていきたいという。その辺に関してご意見をいただければ。この方針4では、その辺を意識している？

(星野部長) 今おっしゃったのはどちらかというとな方針2ですね。「多様な育ちと学びの切れ目ない支援」が、今おっしゃった発達支援を意識しております。

(磯田市長) なぜこういう要望が出るような状況になるのか私もよくわからないんですけど、近年、この問題については、非常に悩んでいる家庭も多いし、あるいは、保育園、幼稚園現場では、相当エネルギーが割かれていると思うんですよね。こういうものも一つの多様性の中に捉えていくべきだろうと私は思っているんですけど、どうでしょうね。学校現場からすると、単純に多様性と割り切るわけにもいかない専門性がやっぱり必要になってくるということでしょうね。

(金澤教育長) そうですね。支援する立場からすると専門性が必要ですし、ただ、一言で多様性とするかですが、実は特別支援が必要な子どもたちというのは、その子どもたちの支援を必要だと同時に、その周りの理解というか、どういう環境で育つかが大事なので、支援を受けてその子だけが育つだけではなくてですね、受け入れる周りの理解、周りの人たち、周りの社会の情勢もすごく大事だと。そこと合わせてどうやっていくかが大事で、私達が今進めようとしているのは、まさに市長がおっしゃるように、早期に特性を見いだして、早くにその子たちの支援に繋げて、それとあわせて、インクルーシブというのを共生の視点でみると同時に、その子たちが受け入れられる社会集団をどう形成していくかということの大事さを両輪でやっていかないとダメだと思います。

(磯田市長) 最終的には職業にしっかりつけるかどうか。産業界の受け入れという問題があって、それは今教育長がおっしゃったようなその理解ですね、現実的にそれなりに努力というか、対応してもらわなければ駄目なので、そこは商工部を中心に、あるいは教育委員会の高等総合支援学校の先生を含めて頑張りがなければ駄目だと思っていて。ここが実際に教育の現場では一つの大きな課題になっている。発達支援という表現は使わないものの、方針4の中に取り込んであるんですよね。

(金澤教育長) むしろ方針2の方ですね。

(磯田市長) 子育て日本一を目指すとしたら、長岡としてはここはしっかりと長岡モデルでやっていきたいと思うところで、こうした問題について、皆様のご意見はいかがでしょうか。

(熊倉委員) 学校現場的に考えると、かつて特殊教育と言っていた、発達が遅れた方々への教育から今、特別支援教育になって 20 年ぐらい経つのかな。教育長のおっしゃった当該児童生徒と共に、周りの受け入れ態勢も大事だということが共有されてきて、それがインクルーシブな形でもって合理的配慮を入れましょうということで定着してきています。小中学校では、それがスタンダードになりつつあり、特別支援学級以外にも通常の学級の外にもいるわけですので、それも含めた土壌はできている。今課題になっているのが、幼稚園、保育園、生まれてすぐあたりから切れ目のところをどう接続するかとか、総合支援学校で特に高等部あたりの就労支援に力を入れてきています。そこのところをどう実業界に繋げるか、接続部分を誰がどういうふうにコーディネートして、持っていけるかという辺りも一つの道筋を描けるとモデル的なものになるのかな。

(磯田市長) 政策的には当然そういう流れの中でやっておりまして、教育大綱としてはそこまで広がりや想定はしてないと思いますが、政策としては当然、その出口のところ、あるいは着地点まで意識してやりたいと思っています。なんでもよろしいですが、問題に関して、日ごろ皆様がお考えになっているとか、こういうふうに教育委員会で、長岡市でがんばって欲しいということがありましたらご意見をお願いします。

(廣川委員) 次期教育大綱の策定が令和 7 年から令和 11 年の長いスパンの中で見ているにあたって、方針 5 の環境整備の中で、今回、文字として入っていないですけど、今、社会的に統廃合のこともクローズアップされているので、そういったものも環境整備の一環として取り組んでいく必要がありますし、今現時点で長岡市、教育委員会も丁寧に行っていると思いますが、言葉として入っていないのでそこも入れてもいいのかなど。

(磯田市長) 統廃合という問題は、教育大綱的にはどんな感じなんでしょうか。

(金澤教育長) 統廃合ありきというよりは、今教育委員会で進めている方針ですが、少子化の中で子どもたちの数が減ってきていて、ごく小規模の学校が増えてきている

中で、そういう時に子どもたちの教育環境をどう整えていくことが良いのか、その中の選択肢として統廃合があるのですが、そういう意識を持ちながら、仮に文言で整理する際は、その教育環境を整える中で統廃合を視野に、子どもたちの教育環境を整備していくというような、そういうような書き方だと思います。数が減ったらどう反映しますよというようなことにはならない。

(磯田市長) 現実問題として、統廃合の問題はいっぱいおきています。地域の人たちはどちらかというと、統合をしないで欲しいという人が多いけれど、子育てをやっている保護者の皆さん、若い方々はやっぱりそうはいかないよ、子どものことを考えたら、やはり友達はある程度必要だよということで統廃合を求める地域は増えてきていますね。無理矢理統廃合をやりたいと言わなくても、地域からそういう声が出始めていますので、それはおそらくどんどん加速していくと思います。子どもがいなくなるんですよ。初めから複式学級のような学校では困ったなと皆さんは思うわけですよ。複式学級が当たり前になってしまうと、皆さん危機感を持って、統合という問題を自ら持ち出してきました。もういくつかそういう地域があって、これからどんどん進んでいくと思います。子どもの数は簡単に増やせないんですよ。生まれた赤ちゃんの数で大体わかりますから、6年後には小学校1年生が1クラス何人いるのかすぐわかりますから、そういうデータを示すと、これは今のうちに統廃合をやらなければ駄目だという話は当然出てきますね。教育委員会も私もそこをしっかりと意識してやっていきたいと思います。

(大久保委員) 技術が発達したりして、いろいろな効率化がされていますが、新聞によると、来年度から、公立高校の内申書が成績だけになると。記事の最後には、先生の負担軽減に繋がるだろうというようなことが書かれていたのですが、必要な部分は効率化していく必要があると思うんですけど、しわ寄せが子どもに行かないか、効率化することによって、例えば子どもが自然に成長してついていく力とか、そういう力がつかなくなってしまう、ということがおきないで欲しいなと思います。必要があれば人件費、スクール・サポート・スタッフなどをたくさんつけるようにしていきたい。

(磯田市長) 学校は、業務や先生の仕事の効率化というものは、余地という言葉はお

かしいけれど、可能性はあるんですか、どうですか。

(金澤教育長) 今、だいぶすりおとしてきています。

(磯田市長) 何かその辺でご意見とか状況を説明していただければ。例えば特に子どもの教え方とか、今後の、タブレットの活用がどうかとかですね。あるいはもっとITを活用した効率的な教え方とかそういうものは想定されていますか。

(玉木管理指導主事) 効率的な使い方というか子どもたちの学びが深まるような使い方として、今は、ぱっと打てばわかるとか、ログインすれば本当にわかりやすいんだけど、それが本当に子どもたちの学びとして深く浸透するかというと、効率の良い表現の仕方とか、情報共有をする時はとてもいいですが、それをしっかり身につける時は、書いてみるということも必要だったりするので、ケースバイケースで、いろいろな場面でこんな使い方ができるよというのが、だんだん浸透してきたので。こういう時にこう使うととってもいいよね、子どもたちの教育に本当に良かったよねというようところに来ているのかなと思っています。

(磯田市長) この間、新聞で見たのか忘れましたが、今の子どもはタブレットやスマホですぐいろいろな情報を調べて、すぐぱっとわかるんだけど、3日前のこと、1週間前に見たこと、あるいは先生から教わったことはすぐ忘れて、この間教えたばかりじゃないかと言っても、教わっていませんと言うようなタイプの子が、どんどん増えているというんだけど、どうなんだろう。本当に深くその子に知識や情報が残っていく形にはなっていない恐れがあるということを言ってる人がいましたが、どうですか。

(玉木管理指導主事) 一般的な感覚だと、どうせまた見ればわかるからということですよ。頭に記録しておく必要がないと思ってしまう。

(磯田市長) 単なる一つのCPUとかメモリーでしかないというね、そこでずっと蓄える必要はない。

(玉木管理指導主事) 昔は全部を覚えなければ、電話をかけられなかったんですけど、今は電話番号を覚えていなくてピピッとやれば繋がる。

(磯田市長) 手書きで何かやるとそれが定着するとかそういうことですか。

(玉木管理指導主事) それも実証をしてみないとわかりませんが、我々は書いて覚え

たりして、頭に焼き付けた経験があるので。そうすると本当に頭に残ると、実体験として。

(金澤教育長) 国語などは、今、タブレットを止める方向です。要するに学力が定着しない、学力が伸びないということでその意見があると思うのですが、その中で、やめていく方向になったりしているので、さっきの働き方改革の視点で言うと、タブレットを使ったから、子どもたちの授業や学びが楽になるということはまずないと思うんですよね。むしろ、それを使ってどうきちんと定着させるかということにもっと注力して欲しいと。削れる部分はそれ以外の事務手続きだったり、事務仕事だったり、それから、スクール・サポート・スタッフに入ってもらえば、教員以外ができる業務があるので、そっちを削るということが大久保委員が言われた働き方改革に繋がる。ICTを使って学びが楽になっていくことはまずない。

(磯田市長) こういう話をする時、子どもの能力というか、正規分布があるとして、どのぐらいを想定して、全体を想定していますか。

(玉木管理指導主事) 私は、中の下ぐらいの子どもたちがしっかり理解できるように話をしたり、いろんな例えを、こういう考えで、こういうだけかぶせて、そうするとなかなか理解するのが難しい子どもたちも理解できるだろうなという形で授業を進めていました。

(磯田市長) 私、高校で数Ⅲの勉強をしなかったからわからなかったんですよ。数Ⅲの授業の時、本当に苦しくてね。わからないことを延々と説明されたり、試験に出されるのは、非常に苦痛でしたが、そういう子どもは小中学生でいないですか。よく理解できなくて、いつもお客さんになってしまう子どもはいないですか。

(金澤教育長) ゼロではないと思いますが、そのために、今だと教育補助員が入って、特に数学は差が出てきますね。国語や社会は、その時全くわからないということはまずないですが。

(磯田市長) いや、でもそれは思い込みなんです。本当にわからない子はいるかかわからない。

(金澤教育長) 数学だけは、わからなければ本当にわからないんです。積み上げができなければわからないので。社会だとその時に一緒に考えようということができ、深

掘りの差はありますが、数学は差が出てくる。そうするとお客さんになる子はそういう教科に出てくる可能性はあります。そうすると、TTや、複数の教師が入ったり、あるいは教育補助員が入るという形で対応する。

(磯田市長) そのお客さんというのが、単純に能力というよりも先ほどの発達の問題じゃないけれど、ある種の特性、それなりの専門性を持って対応すれば、乗り越えられるかもしれませんよね。その辺は、きっちりやることは難しいですよ。

(金澤教育長) 小学校の算数は、抜き出しという形で、その子用に特別に授業をしたり、いわゆる適応指導教室とか特別支援学級にその時間に行くという対応は、始まっています。要するに、一人ひとりに対応した学びを保障するという意味で、だんだん定着して進んできております。昔のようにわからなくても、そこにいなさいという形ではないです。

(熊倉委員) 本当にわからない子は多分いますよね。確実に。その子はおそらく数十年前、20年前だとしようがないですねということではありますが。今はそういう子に目を届けましょう。そのために教化しているんですから。なかなか苦しい子には、別室でやるとか。タブレットの中で、ドリル問題があって、去年やったことの割り算やドリルをさせたりするんですよ。ですので、個別最適な場合と言われますがそういうのでタブレットを使ったりもしますので、やっぱり手立てはできる。

(磯田市長) 多様性というならば、いろいろなチャンスを与えていくことも必要かなと思って。場合によっては学校で難しければ、学校外で、そういった希望者がいたら、そういうものを、学びの場を学校外で作ってもいいかと考えたりするんです。皆様、自由におっしゃってください。

(廣川委員) 今現在フリースクールが長岡に結構ありまして、補助が出ています。

(金澤教育長) 教育委員会じゃないところが、生活困窮世帯がそこに行くと補助するという話になります。

(廣川委員) 不登校のそういったフリースクールが長岡もいろいろでき始めていて、そういった民間が受け皿になって、徐々に、これからも広まっていくのではないかとこの予感があります。そういった中では市が何か一つモデルがあっても、選べる選択ができるっていうのはすごくいいことだと思います。

(磯田市長) 教育委員の皆様、そして教育長、教育委員会全体の担当の皆さんがいる前でこういうことを言っているのかわからないですけど、学校は本当に行かないと駄目なんでしょうかと。究極はそういう問題も出てくると思うんです。学校でない学びの場があってもいいのか。選択として、フリースクールもやはり私はこれから充実していくのがバランスとしてはいいんだけど、教育長としては許せないですか。

(金澤教育長) いや、そんなことはないです。現に今ここで、社会性を育成している子どもがいるわけで、ただ、何でもいいわけではないというところが難しいところ。それがあるので、長岡は登校にカウントできるガイドラインに従ってフリースクールが、活動をやってくれているので、それについては、学校教育に準じて、出席と認められますよと線引きはさせてもらっていますが、そういったフリースクールが増えてくるといいかなと。ただこの間、フリースクールの方と話をして、話を聞けば聞くほど、学校みたいですねって言っちゃったんですよ。そうすると何かフリースクールの良さがなくなっていくのかなと。私が言うと良くないかもしれないですが、学校に行けなくてフリースクールに行っているわけなので、フリースクールが学校化してはいけないと思う。学校化としては良い面もあるが、その子どもたちは行けない、そのハードルになっている部分の学校化が顕在化してはいけないと思っている。バランスなんだけれども何でもいいかという、そうではない。子どもたちの成長に機するものでなければいけない。その辺が難しいことをうちの担当がよく足を運んで、中の様子を見てもらって、一緒に連携しているので、長岡の中にそういうのが広がっていくのいいのではないかと考えています。

(磯田市長) 不登校の子どもが、今 653 人。すごく増えてそこに対する対応をどうしたらいいかというのは、長岡全体の行政としても、それが将来的には大きな課題だなと思っていて。最近の引きこもりの問題が難しいのは、40代50代のひきこもりと言われる人ですね、それはその人の人生じゃないかなと思うけれど、ひきこもりだから出してほしいと親は言うわけですよ。そこまでこうだったら、だんだん年代が上がってきて、不登校とは違うんだけど社会に出たくない人が、だんだん高齢化してきている。学校、義務教育の時代から、そこは対応できるものはしっかり対応していく必要があると思う。その辺は何か、ございますか。

(金澤教育長)　うちの不登校担当が言ったことですが、一度ちゃんと不登校をした子は、深刻なひきこもりになりません。全部が全部とは言えないですが、不登校を経験しなかったばかりに、ある年齢になった時にもう本当に一切社会に出ないケースがあるんですよと言われて、なるほどなど。要するに、そういう体験を小中学校の頃にしてそれをある程度自分のエネルギーでクリアした人は、引きこもりにならずに社会に適應できる子がいるということなので。議会答弁でも言っていますが、ともすると、不登校は引きこもりの予備軍だと言われる方がいるけれど、決してそんなことはないと思っています。よくぞ今やってくれたというか、そして今よくぞエネルギーを貯めてまた再登校もしくは次のステップに進んでくれたということもあると思うんです。だから、イコールで考えてはいけない話とっております。

(磯田市長)　むしろ不登校の勧めがあってもいいわけですか。そういう傾向のある人達を積極的に雇っていき、鷲尾委員、そういう気持ちはありませんか。

(鷲尾委員)　うちの会社の社員で不登校の方、お客さんでもお子さんが不登校で悩んでいる方はいるわけですが、僕の見立ての中で共通するのは、親が完璧主義で、箸の上げ下ろしまで干渉するというか、あれしなさい、こうしなさい、そういう過干渉の傾向はあるような気がします。それからそういう脱落してしまった人を雇うかと言うと、去年、35歳で、やっぱり不登校で高校も中退して、職歴を見ると非正規の仕事しかしてなかったけれど、たまたまうちの社員で、その彼と小学校からの同級生が、社長、こういう奴がいて、うちで雇ってくれないかと直談判され、面接をして結論的には雇ったんですが、その彼に、何を言ったかという、人生やり直す覚悟があるか、頑張ってみるか、いろいろあったかもしれないけれど逃げてきたんだよな、頑張ってみるかと聞くと、頑張ります、よし信じる一緒に頑張ろうと、1年経ち、今輝くように働いています。だから、結局、僕は教育委員にさせていただいて、一番学ばせていただいたことは、教育は心に火をつけると。だとするならば、ひきこもりだった子も何かのきっかけで心に火がつけば、また火をつかす人との出会いとか、火が付くきっかけがあれば、いくらでも社会復帰できる可能性は十分あると思うけれど、残念ながらそういう人との出会いが、ないままいつてしまっていて、8050問題になっているような気がしますね。

(磯田市長) 心に火をつけるのは親じゃ駄目なんですよね。

(鷲尾委員) 親はつけようと思ってを消火してしまうんですよね。

(磯田市長) 他人というか、他者じゃないとだめ。熱心に一生懸命火をつけようとして水をかけて、そういうことですね。そういうことも含めて教育現場では、一人ひとりの子どもを見ながら先生はいるのですが、いかんせん先生1人で30人40人とか、そういう子どもの心に火を灯すまで育てるということはなかなか難しいとか、そういう意味で、長岡にも多様な心に火をつけることもできる方々もいっぱいいると思うので。学校外での学びの場をこれからの土日の中学の部活が地域移行化して、平日もということになってですね、おそらくそういう方向に行くとスポーツというのは、その子に火を付ける一つの大きないいものだと思うのですが、それが学校現場から、将来的には離れていくこと、これは大きな影響が出るのかなと思うんです。長岡はぜひそれを地域で、先生方の代わりに、しっかりとスポーツを通じて、あるいは文化活動、芸術活動を通じて、子どもたちの心に火をつけられる人材を集めてとか、皆さんにお願いして、子どもたちに接してもらいたいと思っています。先ほど申し上げた大学の教授OBもその一つの仕組みとかチャンネルかなと思います。

(鷲尾委員) 定例会で現場訪問をさせていただくと本当に素敵な先生がいっぱいらっしゃるので、感動します。毎回素敵な先生だなと。実際僕も教育委員に声をかけていただいた理由の一つがPTA活動を一生懸命やった流れではないかと勝手に思っているんですが、当時の思いはここにいらっしゃる先生もそうですけれど、子どもたちと向き合っている素敵な先生方がいっぱいいて、40代50代の素敵な先生方がいっぱいいるけれど、20代30代の先生方は、どうなのかなと。今は子どもが成長してしまってそういう先生方と触れ合う機会がPTAとしてなくなったし、教育委員という立場をいただいて、校長先生とかそういう管理職とか、クラスの先生方とお会いして、本当に素敵な方々に次世代の教員の方々がどうなるか。これがただ残業時間という数値化された中での働き改革が進み、いわゆる働きがい、生きがいの要素が見えなくなってしまって、さらに部活で子どもと向き合うとか、そういう熱中感動夢づくり的な要素も減ってしまって、先生方が本当にワークライフバランスを優先してしまったその先に、教育現場でどうなのかなと若干心配があります。

(磯田市長) 若い先生方、主事の方々はどうですか。

(玉木管理指導主事) おっしゃる通り、今度我々が、校長として現場に行った時に、部活はなくなりますよね。でも、その分今度は自分でこんなことやりたいと考える時間があるんです。僕たちがよしやってみろ、面白そうじゃないかと後押ししてやったり、長岡市は校長裁量予算をしっかりと取っていただいているので、こんなことやりたいんですと言ったら、よし、校長裁量予算でいくかという感じで、もう思いっきりやって失敗してもやらせるぐらいの度胸を我々が持つことが大事かなと思います。

(稲毛管理指導主事) 先ほど鷺尾委員がおっしゃったように、私達世代がワークライフバランスの中で働き方改革を時間だけで見ていくというのは危惧しています。やっぱり教師なので定時で帰れる仕事だからやっているわけじゃなく、子どもたちの頑張る姿、成長する姿を見たいと、そういう思いを強く持っていたから職を選んだわけですよね。そういう中で、時間、時間と言っているわけですが、この間表敬訪問のあった豊田小学校の取り組みなどは花火ですよね。時間外でやらないようなことはないの、そこに価値を見いだしている教師、そして長岡市はたくさんの学校があり、素晴らしい教師がいる中で、そういう実践がたくさん発表されている。それを見ていく中で、20代30代が各学校の管理職、そこがいろいろな教師の心にも灯がともると思います。そういう活動、そして学校教育活動を行っていますので、継続していく、良い取り組みをどんどん発信していくことが大事だと思います。

(佐々木管理指導主事) 学びが定着しないとか、見たことはすぐ忘れてしまうとかそういう現状もあるんじゃないかという話があったと思いますが、今求められているのは、例えば昔やっていた一夜漬けでテスト勉強して、覚えて、頑張って知識を得ていたものというのは、剥落して、また、受験勉強で頑張ったことも数年経ったら忘れてしまうといった知識の身の付け方でなく、聞いたことを、実社会の現象と繋ぎ合わせてみるとか他の子たちの考えを聞いて、違った見方で取り入れられるとか、そういった議論をたくさんして社会と繋げて、その知識を自分のものにしていく、それが生きた学びに繋がるということがよく言われていますので、私は学校現場に戻ったら、地域の中で子どもたちが地域の一員として活躍できる、その中で学んだことが生きた知識として身につけてそれが将来生き抜く力に繋がるのではないかなと思っています

ので、そういった教育活動をいろんな学校に展開できるよう、働きかけていきたいと思っています。

(磯田市長) 今日の議論を踏まえながらですね、教育大綱をしっかりといいものを創って。

(金澤教育長) 今日の感じだと修正はなしでいいかと思っています。

(磯田市長) こういう形でまた次の5年間をしっかりと頑張っていきたいと思います。またこれから留任される方は引き続きいろんな機会を捉えていろいろアドバイス、ご提言いただければと思います。何卒よろしくお願いします。先ほどおっしゃった頑張るといふその覚悟を持つことが、本当に人生をつくる。覚悟を持たないこと、どんなに頭が良くても、どんなに知識があっても、一生それは本当に駄目になっちゃいますよね。なぜ覚悟を持たないのか、持たないのかというのは、私自身も、そう簡単に覚悟を持っていた人間ではないので、自分としてもよくわかりませんが。どうやったらその覚悟を持たせることができるのかというのは、学校現場でも、あるいは社会にとっても、大きな課題というか、それを意識しながら、それが人のため、一人ひとりがいることの意味だということで、この大綱の中にもそういうことが書かれていますので、ぜひそういった長岡の教育をしっかりと進めていきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。今日は本当に長時間にわたりありがとうございました。

(竹内教育部長) 以上をもちまして、総合教育会議を終了いたします。本日はありがとうございました。